

幻の古代道路を追って

池田 誠一

■【10】両村駅の跡…尾張丘陵を越えて■

1 駅家跡の発見

10年ほど前、この地方の古代道路に関する重要な発見がありました。それは昭和30年代に豊明市上高根の行者堂で見つかった瓦が、古代道路の駅家のものである可能性が出てきたのです(図1)。確認したのは名古屋市博物館の学芸員の梶山氏で、古代瓦の専門家です。理由は、簡単にいえば、①瓦の年代が8世紀中頃のものと考えられること。そして、②当時瓦葺きの建物は寺院か国の役所で、現地では東海道の駅家しか考えられないことでした(後述、文献①)。

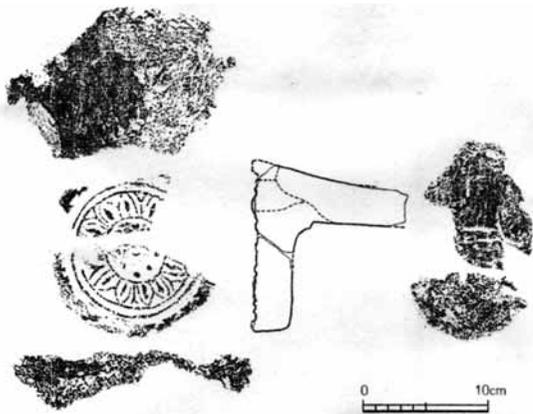


図1 上高根行者堂で見つかった天平の軒丸瓦(文献①)

上高根という所は豊明市の東北部の沓掛町の中にあり、前回説明した島田の遺跡からは東南に5[㊦]程。両村駅の定説になっている二村山付近からは東2[㊦]程になります。今回は、この両村駅の跡をめぐる、天白区の平針からこの豊明市の上高根へと進むことにしたいと思います。

2 両村駅をめぐる

(1)これまでの議論

古代東海道の駅家については、10世紀に記録された「延喜式」と「和名抄」に記述があります。そこでは尾張国には馬津、新溝、両村の3駅があり、山田郡に「駅家郷」の名があることから両村駅は山田郡にあったと考えられています。これまでの両村駅をめぐる議論では凡そ次のような場所が提案されてきました。

- A 二村付近(豊明市)
- B 島田付近(天白区)
- C 白土付近(東郷町)
- D 傍示本以北(東郷町)

ここで、Aは「両村」と「二村」との名前の類似性の他、「間米(まごめ)」、「マヤド(馬宿)」という地名があったことです。

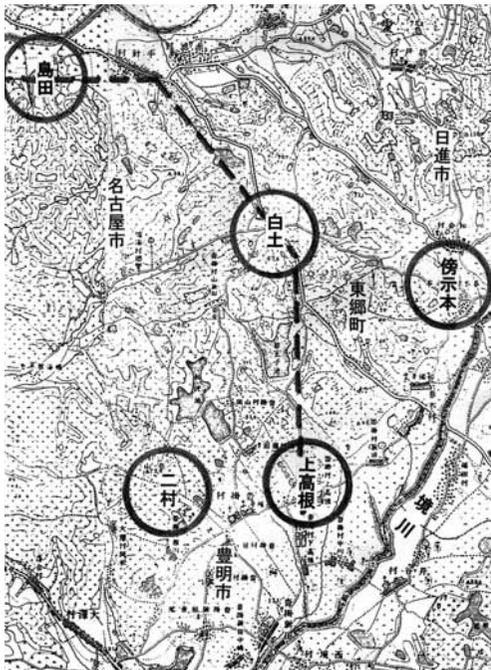


図2 両村駅の候補地。破線は古道想定ルート

Bは前回紹介した天白区の島田の陶器散布地点です。Cは京都大学の足利健亮氏が示した興味ある地点ですが根拠は分かりません。そしてDは愛知郡と山田郡の境を東郷町の傍示本(くいで境界を明示した所)とし、駅家をその北の山田郡寄りに求めようとするものです。

しかしこれらは何れも決め手が無く、山田郡の郡域と共に、議論はまだ収束していません。そこに新たな候補地として、上述の、

E 上高根付近(豊明市)が登場することになりました(図2)。今度は具体的な「瓦」という駅家の遺物を伴っての登場です。

(2)上高根の遺跡

上高根の行者堂遺跡の瓦は、昭和36年に地元郷土史家の人達によって採集されました。それを近年になっ

て、古代瓦の専門家の梶山氏が取り上げて分析したのです。その論文(文献①)を簡単に紹介すると次のようになります。

瓦片はあまり多くはなく、数点の軒丸瓦と丸瓦、ほとんどは平瓦でした。その軒丸瓦の文様等を観察すると、平城宮6225型と多くの共通性のあることが分かりました。また技法的には積上げという、それまで当地方には無い方法で作られており、総合すると745~757年の前半頃の瓦と推定できました。そしてこれらの散布区域があまり広くないこと、付近に古代寺院の記録が無いことから、寺院の瓦ではないと考えられました。一方近くを古代東海道が通っていたとされていることから、当時瓦葺きの建物の可能性のある駅家が候補になったのです。駅家だとすれば、

- ①立地：境川から1段上がった台地上という好立地なこと、
- ②駅間：西の古渡、東の宇頭(岡崎市)と想定される隣接駅家のほぼ中間地点になること、

- ③線形：通過地点も妥当で、条里制区画と斉合あるルートが設定可能なこと

など、駅家としての幾つもの妥当性が考えられるのです。もちろんこの地点にも決定的なものはありませんが、両村駅の候補地として、さらには古代東海道のルート論にも大きな一石を投じることになりました。

(3)白土の峠道

さて、古代の両村駅が上高根付近だとすると、古代東海道はどこを通過していたのでしょうか。梶山氏はこの点にも具体的に論及し、北は平針から、白土、上高根を通過して南の三河八橋方面に向かうコースを想定しています(図3)。当連載ではこれまで、古渡から石仏を経て、一つはまっすぐ進みや南に振って平針に



図3 梶山氏の想定した古代東海道ルート。上高根付近に古代の遺跡が集中している

(推定) 古代東海道と付近の遺跡
 (●)上高根行者堂遺跡、▲古代の遺跡

至るコース、もう一つは石仏から迂回して八事丘陵の裾を廻り島田に出るコースを想定してきました。これらはいずれも平針で東南に方向を変え、梶山氏の想定ルートに繋げることができるのです。

平針から上高根へは尾張丘陵という50～100^{メートル}の低い丘陵地帯を抜けます。その中でも梶山氏が想定した白土を経由する道は、谷筋を上って下るため緩やかな低いルートが取れるのです。このルートは江戸初に徳川家康が開いた岡崎街道も通っています。

白土からは、東南に進む岡崎街道と分かれて南に若王子川に沿って下ると、川の西の台地上に上高根があるのです。

3 絶行 尾張丘陵を越える

… 平針から上高根へ …

それでは、平針から尾張丘陵を越えて三河との国境を流れる境川の手前、豊明市の上高根へと歩いてみたいと思います。

〈平針から〉

地下鉄の平針駅から平針住宅行のバスに乗り、平針小前停で降車します。少しバックした蓮池交差点が、前回終点の延長上の道になります。ここまで来ると、南側には丘陵が迫り、東側にも秋葉山の緑が近づきます。

ルートはこの秋葉山の北を回りこみ東の川沿いを通るか、手前を右に曲り小さな丘を越えるかです。ここでは秋葉山の正面を通る後者を選びます。道路が少し複雑ですが、交差点を東に2本行き、右2本目を左に曲ると針名神社の東側を通る道になります。針名神社は延喜式に名のある式内社ですが、近世に北方から移設されたようです。少し先に行くと左側に秋葉山慈眼寺の入口があります。この

蓮池交差点からは東に秋葉山の緑がせまってくる



慈眼寺の入口。坂の上に本堂に上る階段がある寺は、809年、都が大火の時、秋葉三尺坊がここを通り、真筆を残したと伝わる寺です。道はわずかに上ってから下りになります。その向こうは区画整理されており、まっすぐ進むと左にカーブして旧岡崎街道である県道に出ます。最初に分かれた秋葉山の東をまわる道とも合流です。少し先の交差点を右に200^{メートル}ほど入ると荒池の堤防から池が見渡せます。信号からは、荒池を東に迂回して県道を進みます。古道ならばまっすぐ白土に向かったのでしょうか。



荒池。正面に見えるマンションが白土になる
〈白土から〉

白土は、北が今進んできた天白川の支流繁盛川、西が扇川、南が若王子川と3つの川の始点になっている峠で、交通の要衝でもあります。県道をそのまま迎ると道は下り坂になり、1^{キロ}程行った所で愛知用水の緑道と交差



白土の峠をこえると道は東南に下っている

します。その先の涼松では最近道路が変更されたので道なりに右に進むと、下りきったところが三ツ池交差点です。

ここで考えている想定ルートは、この付近から川沿い下るため県道と分かれて西南に方向を変えます。交差点を右に曲ると左側に水路があります。これがこれから迎える若王子川です。200mほど行くと少し広い道路と交差して川は池の区域になるので左に迂回して進みます。しばらくいくと道は池の端に出ます。若王子池は江戸時代の初めに造られた大きな溜池です。もちろん古代道路時代には無く、道は池の底だったかもしれません。この池の西側池底には古墳時代から奈良時代にかけての遺跡があります。池の堤防に出る手前は端の道が迎れないので少し左手に迂回して進み、橋を渡ると堤防に出られます。

若王子池の堤防。江戸初期地域の手でつくられた



堤防からは水路に沿って下り、次の橋の所で右に曲ります。付近には水田が広がります。池の西側から来た道を横切るとすぐ先に左に入る旧道が残ります。この細い旧道を南に迎れば、農道との合流、分流の後、緩やかに下って上高根の集落に出ます。

行者堂へは2つある社のうち東の社の東端を南に入ります。突き当たって右の細い道に入り、左に曲った少し先です。小さなお堂が段を上がった上にひっそりと建っています。



上高根にむけて、緩やかに下る旧道



上高根の行者堂。明治時代につくられた



行者堂付近から境川を見下す。川からスグの駅家だった？

厨子と行者像は明治初の廃仏毀釈で付近の寺から移されたもののようです。

その後は、左、右、左と細い道を南に下ると、幹線道路旧道です。バスは、もう一つ南に出来た新道に、少ないですが名鉄の前後駅行があります。

4 駅家発掘の期待

愛知県では古代道路の跡はまだ見つかっていません。全国各地で古代道路跡が発掘されている中で、この地方では残念ながらまだ具体的にその姿が見つかっていないのです。

もし上高根の遺跡が古代の駅家の跡だとすれば、東海道では初めての発見になります。そして、瓦が駅家のものだと分かれば、これも初のようなものです。上高根の遺跡はその可能性が高い地域で、区域も絞られています。もし確認できれば、それはこの地方の古代の歴史を塗り替え、大きなロマンにもつながります。是非このことが脚光を浴び、発掘につながるよう期待したいと思います。

〈主な参考文献〉

- ①梶山勝「古代東海道と両村駅-豊明市出土の平城宮式軒丸瓦の提起する問題-」(2000、名古屋市博物館紀要)
- ②木本雅康「遺跡からみた古代の駅家」(2008、山川出版社)